

## イグサ本田における省力的な除草剤利用法

農業研究センター 農業研究所 栽培部  
担当者:橋本 充

### 研究のねらい

イグサ本田では植付時から春先までの冬雑草や、その後の夏雑草の発生により栽培期間を通じて除草剤の散布回数が多く、除草剤の散布作業は農家にとって大きな負担である。また、散布作業はイグサを踏み荒らしてその生育に悪影響を与える場合がある。そのため、簡便で省力的な除草剤の利用技術を確立する。

### 研究の成果

#### 1 散布方法

フロアブル剤型の水田用除草剤は水中での拡散性に優れるので水田内あるいは畦畔を歩きながら3～4m毎に容器を左右に振って簡便かつ省力的に薬液を散布できる。

#### (水田区画の大きさによる標準散布法)

- (1)短辺長30m以下の水田では水田内に入らずに畦畔から散布する。
- (2)30m以上の水田では畦畔からの散布に加えて、短辺の長さによって10～15m間隔で長辺方向に散布する。

#### 2 省力効果

水田において一般的な手回し式散粒機を使った粒剤の散布作業(3kg/10a)に比べると、作業時間は1/3～1/5(試算値)で済む。水田内にほとんど入らず散布できるので作業の負担も軽く、イグサを大きく踏み荒らすこともない。

#### 3 除草効果と薬害

ペントキサゾン・フロアブル剤(商品名:ベクサーフロアブル)は、埴土から砂壤土までの土壌条件において、植付直後の雑草発生前処理で一年生冬雑草全般(スズメノテッポウ、タガラシ、オオアブノメなど)、3～4月の春雑草発生前処理でノビエや一年生非イネ科雑草(アゼナ、タカサブロウ、カヤツリグサ類等)に対して有効であり、イグサに対する安全性は特に問題ない。

### 普及上の留意点

1 薬剤を手振り散布すると薬剤の一部がイグサ茎に直接付着してその付着部が褐変するが、薬剤の付着は薬剤を振り込んだ位置のわずかな茎に限られること、薬剤散布後発生する新しい茎の生育には影響を及ぼさないことから、薬剤の付着は収量・品質に問題ない。ただし、収穫茎の発生後には散布しないようにする。

2 その他熊本県イグサ除草剤使用基準を遵守して使用する。



写真1 ペントキサゾン・フロアブル剤の散布作業  
(畦畔からの手振り散布)

表1 ペントキサゾン・フロアブル剤の登録使用基準(いぐさ関係)

作物名	適用雑草名	使用時期	適用土壌	10a当たり 使用量	本剤のみを使用 する場合の 使用回数	使用方法
いぐさ	一年生雑草 全般	植付後雑草発生前 (11月～12月)  春雑草発生前 (3月下旬～4月中旬)	砂壤土～ 埴土	500ml	2回以内	原液 湛水散布

#### 使用上の注意事項

いぐさに使用する場合は、既発生の雑草に対する効果が劣るので雑草の発生前に、時期を失しないように散布すること。冬雑草対象の場合は11月～12月まで、春雑草の場合は3月下旬～4月中旬までに散布すること。

本剤の1回散布のみでは十分な効果が得られない場合があるので、いぐさに適用がある薬剤との体系で使用すること。

原液がいぐさ茎に付着すると褐変症状を生じることがあるので、収穫茎発生後は散布しないこと。